

教 仏 名 聞

第10号

(発行日)

2011年7月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.e

onet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/^souan/

《 聞法会ご案内 》

○〈同朋の会〉

毎月22日 午後2時始

○〈念仏座談会〉

毎月2日および12日

午後3時より。

○共学会—毎月6日午後7時始

○真宗入門講座—毎月18日

午後6時半始

*8月22日の同朋の会と8月

12日の念仏座談会はお休み

相談 A を 縁 と して

A 「会社を続けようか、辞めようか迷っています」

D 「どうして」

A 「事務の仕事なんです、なかなかうまくこなせなくて、よく上司に叱られます」

D 「叱られるから辛いんですね。だからもう辞めようかと思

A 「ええ、辞めたいと思うのですが。どうしてもいいかわからない」

D 「辞めた方が楽なら、そうしたらいいし、辞めないで続けた方が自分にとって楽なら続けてみたら」

A 「ただ、今の仕事を辞めるというのは何か、苦しいことから逃げてしまうようで。今までいろんな苦しいことから逃げてきたので、また今度も逃げることになると思うとそれがいやで」

D 「辞めるにしても辞めないにしても、どちらを選んでもお念仏を聞きつけていきなさい」

A 「辞めるとやはり逃げにな

ってしまうのでは」

D 「どこまで逃げてても阿弥陀様の中からは逃げれないし、阿弥陀様はいつも南無阿弥陀仏と喚びかけておられるので

A 「怠け者の私は仕事をしなくなったら、食べていけなくなる」

D 「だったら誰かに食べさせてもらいながら念仏していけば」

A 「そんなんでいいのですか」

D 「自分で働いて念仏しているのなら、働きながら念仏を聞けばいいし、働くのがイヤなら、仕方ありません、誰かに食べさせていたただいてお念

A 「でも自分もつとがなければなくてはいけません」

D 「それならがんばってみては」

A 「がんばらねばと思いが、ずるずるとがんばれないままに今までできてしまったのです」

いったらどうですか」

A 「がんばれないままでもいいのですか」

D 「今まで生きてきたようにしか人はなかなか生きられないもんです」

A 「がんばろうとしてもがんばれないという、くり返しでなさないです」

D 「がんばれないままでもいいから、南無阿弥陀仏を聞いていきなさい。南無阿弥陀仏を聞くと、阿弥陀様はここにあなたとともにいつもついて

いる。引き受けている、そのまま念仏するばかりでよい」と大悲をかけてくださっているのです。この世のことはど

つちへどうころんでも阿弥陀様から離れられません。ただ阿弥陀様との結びつきだけは忘れないように」

A 「どうしてですか」

D 「この世に生まれてきたのは阿弥陀様(真理)にあうために生まれたのですから」

D 「なかなかがんばれずにきてしまったのですね。がんばれないならがんばれないままお念仏一つを聞いて

D 「念仏しながら今の仕事を続けられるようだったら続けたらいいし、苦しくて辞めたいなら辞めて家で念仏聞いていけばいい」

A 「やはり仕事はしたい」

D 「じゃあもつと楽にできる仕事を探してみてもいい」

A 「そうしてみますが、もしそんな仕事が見つからなかったら」

D 「家の中で念仏しながら生活していきなさい。どこにいても阿弥陀様といっしょだから大丈夫」

A 「がんばらなくては自堕落な生活になりませんか」

D 「たとえ自堕落になっても、阿弥陀様はあなたを受け入れてくださっています。阿弥陀様にであうと、不思議に生きる元気が自然にわいてきます。阿弥陀仏にあわないと真に生きようとすると力がなかなかでないものです」

A 「仕事もせずに食べなくなったらどうするのですか」

D 「どこまでも阿弥陀仏が引き受けてくださいます。食べなくてたとえ死んでも、浄土に生まれさせてくださいます」

疑いと信心

信心と疑惑の関係はどうなのか、それを最近よく尋ねられます。

「本願を信じ念仏もうさば仏になる」のが真宗の教えであり、本願を信じる信心が仏になる正しき因であると云われます。いわゆる「正定の因はただ信心なり」「正信偈」で、浄土に生まれる因はただ信心だけであると云われています。それゆえ正信偈には「決するに疑情をもつて所止とす」（迷いの境界にとどまってしまうのは本願を疑って受け入れないからである）とあり、本願を疑うゆえに迷いの境界にとどまるといわれています。それで信心とは本願に対して疑いの無い心だといわれているのです。

また、本願を疑う心と六大煩惱（貪・瞋・痴・慢・疑・悪見）の中の「疑」とは違うものか同じなのか、という質問もよくなされます。

こうしたことをふまえて信

心と疑いの関係について考えてみたいと思います。

* 真宗の聞法は弥陀の本願の思し召しを聞かせていただくことですが、仏法聴聞に心がけるようになり、熱心に聞いていけば、かならずといっているほど、本願を信じられないう自分、本願を疑う心が気になつてきます。真宗の教えは本願を信じる一つで助けられる、浄土に生まれさせていただけ、しかるに本願を疑う心が私にあることが見えてきて、疑い心が問題になつてきます。疑い心が気にならないのは仏法聴聞にまだ身が入っていない証拠だとも言えますよう。

本願を信じるか信じないかによつて、浄土に往生するこゝとができるかどうか分かれ、助かるか助からぬかの分かれ目があると聞くと、どうしても内心の疑い心が問題になります。御文にある「か

ならず御たすけあらんこととは、さらさらつゆほどもうたがいあるべからざるものなり」などと聞くと、ますます疑い心が問題になつてきます。どうかして内心の疑いをなくしたい、除きたいというようになりません。そして、聴聞をもつと重ねればいつかは疑い心がなくなるであろうと未来に期待しつつ聴聞に励むのです。

ところが何年たつても疑いの心はなくならず本願を信じる心も生まれません。「つゆちりほどもうたがつてはならないのに疑いがなくならない」ということに悩むのであります。本願を信じたいが信じられない、疑いを晴らしたいのに晴れないというジレンマが続くのです。真宗の聞法者は自力の修行を特別にするわけではないが、しかし信じようとしても信じられない、疑い晴らそうとしても疑いが晴れないという問題に悪戦苦闘するのであります。

そうこうしていると、私は本願を信じられないばかりか、疑うしか知らない、疑いだらけの者であることが知れてきます。それでも何とかこの疑いを取りたいと思ひます

が取れないのであります。中にはこのジレンマのまま一生を終る人もいます。

ところがこういう聞法は弥陀の本願を聞いていようであるいはまだよく本願の真意を聞いていないのです。

弥陀の本願は「煩惱のあるままでもまるまる助ける」との誓いであり、「助からぬ汝を助ける」との仰せであります。

六大煩惱を身に具足している凡夫ですから、凡夫は当然疑いの煩惱を十分具足していません。疑いという煩惱は弥陀の本願をどこまでも受け入れようとしないのであります。これが罪悪深重煩惱具足の凡夫のすがたなのです。

ところが弥陀の本願は「煩惱具足の疑いだらけの者よ、お前はそれ故に助からぬ者なのだ。しかし、そんな助からぬ者をこそまるまる引き受けるぞ、助けるぞ」と喚んでくださっているのです。「疑いの煩惱を取り除いてこい」と仰せられず、「疑うより知らぬ地獄一定の凡夫なれば、そういう者をこそ目当てに助けるぞ、助けさせてくれよ」とまで仰せられているのです。

金子大栄先生がよく引用される先達のお言葉に

「疑い晴らして信ずるにあらざ、晴れざるは凡夫の心なり」とあります。実際その通りです。

私たちは聴聞を重ねて本願に対する疑いを晴らして信じようと思ひますが、疑いを晴らすこともできねば信じることもできない。ところが実は、本願を疑うよりしか知らぬのが凡夫の心であると。疑いが晴れないのが凡夫の本性であり自性であるといわれるのです。

今、そんな凡夫の心に南無阿彌陀仏のご本願はどう仰せられているのか、そこをよくよく聞かせていただかねばなりません。ここが非常に大事なところなのです。

阿彌陀仏は無碍光如来で、私たちのどのような煩惱をも障りなく救いたまう徳を、私どものために五劫永劫のご苦労によつて成就しておられます。それゆえ「そんな疑いだらけの助からぬ、そんなお前をこそ引き受けずにはおかない、助けずにはおかない」と喚びづめに喚んでくださっているのです。

この丸だすけの仰せ、大悲

《住職雑感》

*五月二十七日、ご縁のある方と二十九名で親鸞聖人七百五十回忌御遠忌法要（御日中）にお参りした。五十年に一度の、私には最後の大法要であった。午後は知恩院・青蓮院を周り、夕刻、JR尼崎駅に帰る。

*今年六月半ば、たまたまソウルにある真宗系寺院を十数人で訪れ、そのお寺に縁のある何人かの信徒さんの信仰告白を聞かせていただくことができた。かの寺の住職はまだお若いが仏教学の知識は広く、また布教活動を熱心に展開しておられる。住職さんのお話では、韓国の人たちは現実の悩みをなんとかしたいという人たちが多く、現実的な問題に対する対応には日本の浄土真宗の方法論では対応ができない。それで、現実の問題に対して悩みをもってこられた方々に、仏教に照らして内観してもらい、それに対して住職が寄り添いながら応答していくとのこと、いわゆるカウンセリング的な方法をとっておられる様であった。今回参加された方々は二〇代の若者であったが、ただほかに多くの人が縁を結んでいるとのことであった。今後、どういふ展開をされるのか注目していきたいと思う。

（了）

たぶらかされません。

しかるに信心がないと、自分の疑いやはからいをほんま（本真）にしてしまうのです。だから救いを見失うのです。

眞実信心は、弥陀の本願をはからう疑い、心の罪を知らせ、かえって本願に帰せしめたまうのです。ご和讃に

「仏智うたがうつみふかしこの心おもいしるならば

くゆるこころをむねとして
仏智の不思議をたのむべし」
と聖人は懺悔讃仰しておられます。

云ってみれば、疑い心の煩惱は、信心の光に照らされて、疑い心を慚愧せしめられ、かえって本願を喜ぶ種に変わります。

なお本願を疑う心とそれ以外の疑いの煩惱心とは、疑う対象は違いますが、どちらも凡夫の（疑）の煩惱でありましよう。疑いの煩惱が本願に向かえば本願を疑う心と云われるのでしよう。本願を疑う心は煩惱の中の疑い心と別の心ではないでしょう。

（了）

る仏心であり、信心です。

ですからこの信心には疑いの心は露チリほどもありません。「弥陀の本願に助けられるばかり」という無疑の信心は一生相続してください、弥陀の本願を聞き受ける耳になつてくださいます。阿弥陀様より与えられた耳です。無耳人の私に信心の耳を与えてくださるのです。

また、たとえ信心をいただいても、凡心の煩惱である疑い心は一生なくなるものではありません。それだからどこまでも煩惱具足の凡夫です。しかるに阿弥陀様よりいただいた信心は凡心の疑い心によつて壊れもせず、なくなりもしません。凡夫の疑い心は信心にたいして抵抗ができません。

信心は眞実の心であり、凡夫の疑い心は虚妄の心です。虚妄は所詮虚妄であつて眞実には逆らえません。

それはちやうど光と闇のよくな関係です。周りをふさがれた部屋の中の闇は、どれほど長く深い闇であっても、部屋の一角があいて光がさし込むと、闇は光を通さないわけにはいきません。闇は光に抵

のみ心に気がついて、「なんとまあ、こんな私を救わずにはおかぬとは、本当に広大なお慈悲よ」とお聞かせいだなく。無碍光如来様は私たちに「信じたら助ける、疑うなら助けない」とはおっしゃつていなかつたのです。むしろ疑うほか知らぬ凡夫をこそ憐れみ、そんな救われがたい凡夫だからこそ、そのままなりで助けるとまで仰せくださつていたのであります。そして「今まで私は疑いを晴らさなくてはだめだ、疑いを晴らしたいとばかり思うていて、全く逆さまに聞いておりました」と知らされます。

この大慈大悲のお心が知らされるところに、不思議にも仏心大悲が私の心に知らずして流れ込んで、凡心に離れなくなつてくださいます。いわゆる仏心が届いてくださいます。

私に届いてくださった仏心、これが眞実信心なのです。この信心は無疑の信心です。本願を信じる力の毛頭無い私に本願を信じる信心が本願より与えられるのです。この信心はそれゆえ煩惱の凡心ではなくて、阿弥陀様よりたまわ

正信偈に学ぶ問答

(三十一)

憶念弥陀仏本願 自然即時入必定

(書き下し)

弥陀仏の本願を憶念すれば、自然に即ちの時、必定に入る。

(現代語意識)

阿弥陀仏の本願を信じ念仏すれば、本願力によって即時に必ず仏になる位に入れしめられる。

*

K 「弥陀の本願を憶念すれば、とはどういうことなのでしょうか」

D 「意識にもありますように本願を信ずればということですが、憶念という言葉にそっていいいますと、本願を憶念念仏することといえましょう」

K 「本願を憶うとは」

D 「阿弥陀様がこんな私を助けてくださるとおもわせていただくことです」

K 「阿弥陀仏が助けてくださると思ってもすぐ消えてしまい、また分からなくなりますが」

D 「阿弥陀仏の大悲を憶う心が私の心に定着し、壊れることなく、一生続くほどのおもいは阿弥陀様からたまわった信心の他にはありません。ですから本願を憶うということは如

来様よりたまたわった信心のすがたといえましよう」

K 「それでは信心がないまま、阿弥陀仏のお助けを心に想うたり考えたりしているだけなら、まだお助けは決定していませんね」

D 「ええ、阿弥陀仏の大悲の思し召しをお聞きし、仏心の有り難さを心におもおうのは、真実の信心とはすぐには言えません。しかし、そういう聞法生活は当然続くものですし、それは大事なことです。そういう聞法を念仏しながらしていくしか道はありませんから」

K 「憶念の念は念仏申すと云ってもいいのですか」

D 「ええそう理解していいです。また念は本願を信じ念じている信心のことと理解することもできます。要するに本願を信じ念仏申すことが本願を憶念することといえましょう」

K 「次に本願を信ずれば、即座に浄土に生まれることが自然に定まるのだと仰せられているのですね」

D 「ええそうです。自然にとは、まったく阿弥陀仏の本願の働きによって、こちらがはからわずとも、自ずから定まるということですよ」

K 「なぜ定まるのですか」

D 「阿弥陀仏のお心が私の心に届いて離れなくなり、その信心が浄土に

生まれる因となつてくださるからです」

K 「仏のお心が届かないと定まらないのですか」

D 「ええそうなんです。どれほど真宗の教えを学習し、博士論文を書くほどに真宗の教えに精しくても、浄土に生まれることが定まるとは言えないのです。またどれほど熱心に真宗の教えを聴聞しても、信心が与えられねば、定まったとはいえないのです」

K 「そんなもんなんですか」

D 「ええ、実際、非常に熱心に真宗の教えを長年聞いてきた人が、何かの縁で真宗以外の教えにころつと変わる人もいます。また真宗学の学者になるほど真宗の教えに精しいからと云つても、真実の信心がなければ、どこにどうそれていくとも限りません。いわゆる退転しかねないので」

K 「そうすると浄土に生まれることが必ず定まるのは本願を信受する信心においてであつて、それ以外のその人の頭の良さとか学問があるとか熱心さとか心の持ちようとかに依るのではないのですね」

D 「ええそうです。ですから蓮如上人は『よき人なりというとも、信なくは、心おくべきなり。便にもならず。たとい、片目つぶれ、腰を引き候うよくなる者なりとも、信心あらん人ならば、たのもしく思ふべきなり』と仰せられています。たとえ世間的

には優秀ですぐれた人であつても、信心がその人になければ、仏法のためには頼りにはなりませんと言われ、またたとえ世間的な能力の乏しい、外見はみすばらしい人でも信心のある人は頼もしい人であると思ひなきいと云われています」

K 「浄土に生まれることが定まるのは本願を信じる信心においてであつて、人間の側の学力とか能力とか功績によらないのですね」

D 「ええ、如来様の本願の船に乗つて(信じて)こそ彼岸の岸に行けるのであつて、乗らなければいつまでも海に浮き沈みしてしまうようなものです」

(了)

《盂蘭盆会法要》

8月10日(水)

午後2時始まり

*8月12日と8月22日の集会はありません。8月2日の座談会があります。